

旅心を誘う、 旅の本のレジェンド30選

旅行作家

荒木 左地男

5

戦前から戦中に掛けても、素晴らしい旅の本は何冊もあった。海外旅行が困難な時代でも『西藏旅行記』河口慧海、『マレー蘭印紀行』金子光晴など優れた旅の本が登場し、国内で旅行の大衆化が進んだのは、意外にもこの頃だった。

しかし、敗戦と同時に日本は一気に旅を封印する。1964年の海外渡航自由化までの20年近くの間、外貨とパスポートを手にすることが許された特権的な人たちの旅行記や海外の作家の本をあこがれのまなざしで読み漁るしかなかった。

『インドで考えたこと』

堀田善衛 岩波書店 1957



日本人の出国が厳しく制限されていた終戦直後、作家が海外の旅を書いた本としてはほぼ第1号と言っている。宮崎駿が最も尊敬する人物

一冊の本を片手に旅に出る。

そんな旅を夢想するひとは多いに違いない。いまに始まったことではなく、『土佐日記』や『おくのほそ道』の時代からインターネットが普及した現代まで、見知らぬ土地に旅したひとの旅の記録は、人びとの好奇心を刺激し、旅への思いを掻き立ててきた。少年時代から旅が好きだった私も、たくさんの旅の本を読んで、旅に憧れてきたひとりだ。

そして、それらの本を時系列を追って思い返してみると、それらはバラバラに存在していたのではなく、時代の流れを反映し、あるいは時代をリードする新しい旅のカタチを作

り出していることに気付く。旅の形は時代と共に変遷し、旅の本はその映し鏡であり、時代の旅に影響を与えてきた存在でもあった。

本稿では、戦後から現代まで6つの時代に分けて、それぞれの時代に登場した30冊の本を時代背景と共に紹介していく。取材から10年以上も経ってから出版された本もあり、必ずしも年代ごとの傾向と本の背景がびたりと合致するわけでもない。また旅の傾向が時代の節目で線を引くようにくっきりと変わるわけでもない。しかし、改めて旅の名著を年表（P46）上に並べてみると、時代変化と話題を呼んだ旅の本との見事

●'50年代

戦後旅行記の夜明け。

封印されてきた旅への関心が、徐々に膨らむ。

本稿が取り上げるのは、1950年代も後半あたりからの書物となる。

として上げている作家で、終戦直後の世界観をジブリ作品の底流に探してみるのが一興だ。60年も前に、欧米中心主義とは異なる視点でアジアを観察しており、当時としては画期的な作品と言える。

『どくとるマンボウ航海記』

北杜夫 中央公論社 1960
(写真は新潮社 1965)



堀田善衛はアジア作家会議出席のため、そして北杜夫は船医として海洋調査船に乗り込み東南アジアからヨーロッパまでまわる。どちらも公的な理由がなければ海外に出かけられない時代の作品だ。それにもかかわらず、北杜夫の文章は軽妙洒脱。父は歌人の斎藤茂吉、母は南極まで出かけたスーパーパーおばあちゃん、斎藤輝子、そして兄は日本旅行作家協会会長も務めた斎藤茂太。筋金入りの旅行家一族なのだ。

『オン・ザ・ロード』

ジャック・ケルアック
河出書房新社 1959

旅行者のバイブルと言っている作品が、本国の出版のわずか2年後に日本で初翻訳された。ビートニクと呼ばれる厭世的な若者たちの旅が日本の若者の心にも響いた。福田実訳で『路上』のタイトルで出版されたが、半世紀後(2007)に青山南訳で『オン・ザ・ロード』のタイトルとなった。旅は時代を超えて自由の象徴であることがわかる。

●'60年代

海外渡航自由化で海外旅行の夢膨らむ。

旅の先駆者が描く先進国の旅行記に憧憬のまなざし。

東京オリンピックの開催に合わせて1964年、いよいよ海外渡航が自由化された。その2年前にベストセラーとなった堀江謙一の『太平洋ひとりぼっち』1962は、解禁が待ちきれずパスポートなしでの違法渡航を決断する緊張感が生々しい。

60年代には、そんな海外渡航解禁

禁という大きな節目を挟んで、日本人の旅行観が大きく変わる前後の、日本人の旅への初々しいまなざしが感じられる本が次々と登場した。

『忘れられた日本人』

宮本常一 未来社 1960
(写真は岩波書店 1984)



宮本は民俗学者という肩書きだけではくることができない。本書でも人間力とでもいう懐の深い洞察と慈しみの心が、行間から伝わってくる。丹念に歩き、丹念に土地の人の話を聞く。この「丹念」という姿勢こそ、現代の旅行者に欠落しているものかもしれない。海外渡航解禁前後に、日本人を見つめ直すこの本が世に出た意味は大きい。

『何でも見てやろう』

河出書房新社／講談社 1961
「ひとつ、アメリカへ行つてやろ



う、と私は思った」という有名な書き出しに騙されてはいけない。ふらっと気ままにアメリカに行ったわけではなく、難関のフルブライト留学生として渡航したエリート。ところが、帰り道がすごかった。オスロからの片道切符だけを持ち、1日1ドルの極貧予算で中近東から東南アジアを経由しながらの壮絶でしかも滑稽な旅。この本を握りしめて同ジルトを辿った旅人がその後続出した。

『ヨーロッパ1日5ドルの旅』

アーサー・フロンマー
日本評論新社 1963
フロンマー夫妻が実際に歩いて探した宿やレストラン、交通手段などを具体的に紹介した旅の実用書。いまなら当たり前のガイドブックの手法だが、当時は珍しく、この流れは

日本の『地球の歩き方』などにも継承されている。

『青年は荒野をめざす』 五木寛之

文藝春秋 1967

当時の学生たちの外国へのあこがれを、ここまでぎつしりと詰め込んだ本は他にない。いま読み返すと荒唐無稽とさえ思えてしまう都合のいい出会いや、あり得ない展開が次々と続く。海外に飛び出せばこんなすごい人生が待っているのか。多くの若者の背中を押しした一冊。

●70年代

旅が一般大衆にまで拡大した時代。個人旅行の環境が整備され、ひとり旅目線の旅行記が多数登場

ジャンボジェットの登場やドルの変動相場制導入などで、日本人の海外旅行の一般化が進んだ時代。国内でも大阪万博の開催が個人旅行を活性化し、デイスカバー・ジャパンがそのブームを後押しし、鉄道旅ブームが到来する。79年には『地球の歩き方』が創刊され、バックパックス・タイトルの旅が若者を魅了。80年代へ

と繋がる旅の本の個性化のはじまりとなった。

『印度放浪』 藤原新也

朝日新聞出版 1972

この本は、いくつかの本との対比で読むとおもしろい。ケルアックの『路上(オン・ザ・ロード)』1959は第二次大戦後のアメリカ青年の苦悩が背景だが、『印度放浪』は安保闘争、学生運動に疲弊した厭世的空気が背景だ。同じインド物の『河童が覗いたインド』妹尾河童1985、『深夜特急3(インド・ネパール)』沢木耕太郎1994との対比もおもしろい。インドは時代を超えて、一筋縄ではいかない旅先だと言ったことがわかる。

『河童が覗いたヨーロッパ』

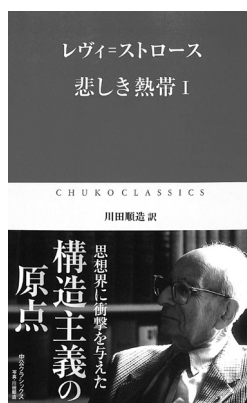
妹尾河童 新潮社 1976

「覗いた」シリーズの第1弾。1年掛けて22カ国を歩き、詳細なスケッチを描いた。圧巻は泊まったホテル115の部屋のスケッチ。いまならスマホでパチリと撮れば済むことだが、相当な時間を掛けてすべて書きで記録。各パートの細かい説明

も手書きで入り、写真では伝えきれない温かみや発見が楽しめる。旅の大衆化で旅人の目線が生活者レベルまで下がってきたことの好例の本だ。

『悲しき熱帯』 レヴィ・ストロース

中央公論新社 1977



1930年代のブラジル奥地の少数部族を訪ねた旅の記録。旅行記というよりは文化人類学のレポートだが、高見からの観察ではなく、原住民へのリスベクトの視線での観察で、冒頭の有名なフレーズ「私は旅や冒険家が嫌いだ」にもそれが表れている。欧米中心主義的視点からではない文明論として読み応えのある一冊だ。訳者の川田順三が書いた『悲しき熱帯』の記憶―レヴィ・ストロースから50年』2010を併せて読むと当時の世界観と筆者の視点

がより理解出来る。

『時刻表2万キロ』 宮脇俊三

河出書房新社 1978

70年代の鉄道ブームを象徴する本。最後の章に、宮脇さんの思いが籠もっていて読み応えがある。2万キロ完乗を達成した直後に、気仙沼線の新線が開通したのだ。廃線になる路線が多い中、こんなめでたいことはない。いそいそと乗りに出かけた宮脇さんの嬉しげな様子が胸に響く。鉄道の旅は宮脇さんにとって線を繋ぐ旅だったが、新幹線や飛行機で線が分断され、乗り物は目的地に着く手段になってしまった。乗り物そのものが旅だった時代。いまはそんな楽しみもなくなってしまったのかもしれない。

『パリ・旅の雑学ノート』

玉村豊男

新潮社 1979

旅のエッセイはガイドブックとしては役に立たないものだが、この本は違う。エッフェル塔もルーブル美術館も出てこないけれど、これ一冊で1週間くらいのパリ滞在は充分楽しめる。もともとカフェと舗道とメトロだけにやたら詳しい旅人になっ

てしまうのだが。40年近く前の本だが、特にカフェについては今もほとんど変わっていないことに気付く(値段を除く)。これもパリの魅力のひとつだ。俯瞰的に海外の街を見るのではなく、路地裏のにぎわいや生活者の匂いまで目を配るほど、旅の視点が低くなった時代であることを感じさせる。

●'80年代

若者主役の旅の大衆化、多様化が一層進む。
等身大の旅の視点で捉えた身近な旅の名著が多数登場

日本が一番勢いを持っていたのが80年代だったのかもしれない。85年のプラザ合意で円高が一気に進行し、海外渡航者は85年の500万人から90年には1000万人へと膨れ上がった。アメリカのビザが免除となったこともあってアメリカ西海岸プーランドが到来した。国内でもデイズニーランドの開園(1983)や瀬戸大橋の開通(1988)で、国内外とも旅行の大衆化、旅行スタイルの多様化が進み、これまでにない肩肘張

らない文調で書き進める、若くて才能ある旅の書き手が多数登場した。

『わしらは怪しい探検隊』

椎名誠 角川書店 1980

探検隊は男の子の夢である。オトナになっても少年の夢はなかなか消えてくれない。椎名誠隊長率いる「東日本何でもケトばす会」(略称東ケト会)の面々が離島でテントを張りサバイバルキャンプを始める。といつても、過酷な自然体験でもなんでもなく、いいオトナが徒党を組んで大騒ぎをするだけ。なのになぜか面白く、このシリーズは現在も続いている。アウトドアブームの先導役とも、脱力系旅行記の先駆者とも言われる。

『ゴー・ゴー・インド』

蔵前仁一 凱風社 1986

バックパッカーなら知らぬ人はいない伝説の雑誌「旅行人」の編集長蔵前仁一さんの書籍第1号。「旅なんてシチメンダクサイことは大キライだった僕に、その素晴らしさを教えてくれたのはインドであった」というフレーズにはビックリ! だっ

てその後「いつまでも旅で眠り続けたい」と言うほど旅にはまったひと。それほどインドのチカラはとてつもないということか。

『深夜特急』

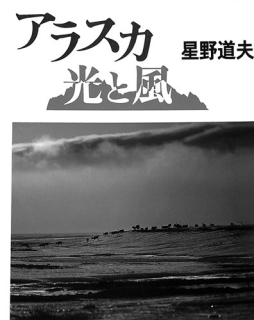
沢木耕太郎 新潮社 1986



表紙のデザインからして旅に憧れる者の心をわしづかみにする。フランスを走る国際寝台列車北急行のポスターである。列車旅の話ではないが、闇の中を疾走する深夜特急のように、青春を駆け抜けるみずみずしい旅体験が多くの若者を熱狂させた。文庫を含めて600万部。テレビドラマにもなるという旅の本は、後にも先にもこれ以外にない。何度読み返しても、なぜか心震える。これほど時代を掴んだ旅の本は、他にない。

『アラスカ光と風』

星野道夫 六興出版 1986
(写真は福音館書店 1995)



日本人の探検家というイメージを変えたのは星野道夫であり、デビュー作のこの本だった。過酷な自然の中に身を置きながら、テントの中で先輩探検家の本を読み、何事もないかのように熊と対峙したことを淡々と書く。そんな人柄がにじみ出てくる探検家に日本人は初めて出会った。後に続くネイチャー作家や写真家に大きな影響を与えた、ひとつの時代のページをめくった旅人と言える。

『幻の怪獣ムベンベを追え』

早稲田大学探検部(高野秀行) 集英社 1989

この本は高野秀行ワールドへの入口。誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白

おかしく書く、という姿勢を貫き通して、その後『アヘン王国潜入記』『ミヤンマーの柳生一族』『謎の独立国家ソマリランド』などの辺境・異境シリーズを続々と著す。旅の本の亜種・傍流とも捉えられがちだが、この流れが、その後の脱力系お笑い旅エッセイストの系譜へと続いていく。

●90年代

旅のスタイルの多様化とともに、旅人の精神的内面や、気負わない旅を切り口とした本へと拡大

80年代後半からのバブル景気は、90年代に入って一気にはじけた。ソ連崩壊、湾岸戦争などの政情不安も加わったが、人びとの旅行熱が冷めるのは21世紀に入ってから。パッケージツアーと自由旅行の間であるスケルトンツアー（航空券とホテルだけをセツトした格安ツアー）も登場。人気テレビ番組から生まれた『猿岩石日記』猿岩石1996が250万部を記録したほか、旅人の精神的内面をテーマにした本や、気負わない脱力系の旅の記録も多く出版され、旅のスタイルの多様化とともに旅の本も多様化し、

新しい読者層への広がりが見えた。

『パタゴニア』

ブルース・チャトウイン
めぐるくまーる 1990

時代の動きに連動しているかどうかを超えた世界の紀行文学として、この本をはずすことはできないだろう。読みやすい紀行文を本書に期待すると当てが外れる。土地から土地へ、人から人へ、エピソードからエピソードへ。即興詩のような展開に翻弄されまくる。チャトウインは旅に芭蕉の『奥の細道』を持ち歩いたというのも日本人にとっては興味深い。

『アルケミスト』

パウロ・コエーリョ
角川書店 1994

旅が舞台の本ではあるが、いわゆる旅の本ではない。世界中でベストセラーになった理由は、おそらく旅の中に様々な人生の示唆が含まれるというメッセージが、やや自己啓発的に描かれているからだろう。旅に『星の王子さま』サン＝テグジュペリ1953を持つていくという人は多い。この本も旅先で読むとさらに

共鳴出来るのではないか。『パタゴニア』と共に、90年代の旅の深まりが、この2冊の読者を増やすきっかけとなり、その後も読み継がれた名著として育ったという時代背景は押さえておくべきだろう。

『アジアン・ジャパニーズ』

小林紀晴
情報センター出版局 1995

日本に居心地の悪さを感じて旅に出る若者たちの群像は『日本を降りる若者たち』下川裕治2007（後述）でも紹介されるが、この本より10年以上前に、敷かれたレールに乗ってただ生きるだけの暮らしに違和感を覚えて、逃れるようにアジアに旅する人たちを丹念に追いかけた本を小林は著した。かつてアジアを旅した屈強な旅人のイメージとは異なるナイーブな若い旅人像は、日本人が旅に求めるものの変化を象徴している。

『もの食う人びと』

辺見庸 共同通信社 1994
（写真は角川書店 1997）

91年に芥川賞を取った著者の『自



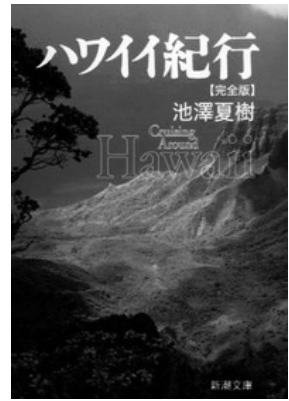
角川文庫

動起床装置』1991も強烈だったが、この本はさらに衝撃的だった。残飯食いから人食いまで、飽食の日本をひとたび出れば、もの食うことは生きることに直結していることを、ぐさりと指摘する。食に強軟でないものは、生きることにも強軟さを欠く。グルメに興じている日本人ははつとさせられる。90年代に起こったバブル崩壊が、筆者や読者の目を飽食と飢餓に向けさせたことは想像に難くない。
平成6年度JTB紀行文学大賞受賞作。

『ハワイ紀行』

池澤夏樹 新潮社 1996

『ハワイ』が観光客におなじみのリゾート地なら、『ハワイイ』は世界の近代化の波に荒らされる前の、



大國アメリカに征服される前のハワイの残滓を表す言葉なのかも知れない。月並みなハワイ旅行から脱する本書の旅へのまなざしは、成熟しつつある日本人の旅行観の象徴とも言える。歴史に根付いた不動のものを見直すという時代の価値観を池澤が見事に捉えた作品だ。

●2000年代

若者旅の減少とシニア旅の拡大を背景に

旅の本のテーマの細分化が進行

同時多発テロ、SARS、イラク戦争……。海外旅行への危機意識の高まりは、不況と重なって旅への志向にブレーキを掛けた。旅に出る若者が減る一方で、定年を迎えた団塊世代のシルバー旅行が伸び、旅の二

極分化が始まった。旅の本もエコロジー系、体験型、カルチャー志向などテーマの細分化が進む。女性が書く何冊かの旅の本も話題を集めた。

『ガンジス河でバタフライ』

たかのてるこ
幻冬舎 2000



藤原新也が『印度放浪』で衝撃的に描写したガンジス河の火葬から30年。黒こげの死体が流れていたその河で、21世紀には、女の子がバタフライを泳いでしまうのだ。心配性の女性の初めての旅が香港からインド。根がタフだからできたわけではない、でもトラブルを笑い飛ばす快活さが彼女の身上。同時代の多くの女性が彼女の生き方に共鳴した。この頃には、作者との価値観の共有は、旅の本の大きなテーマとなった。

『旅行者の朝食』

米原万里 文藝春秋 2002



同時通訳者にはなぜか名エッセイストが多い。異なる文化の橋渡しの仕事だからかも知れない。本質は細部に宿る。細かいちよつとしたズレや違いが、笑いと共にものの本質を伝えてくれる。本書にはロシアの食にまつわる抱腹絶倒の小話が山ほど詰められている。間違っても旅先で食べる朝食の本ではないので、そのつもりで。そんな話も少しはあるけれど。

『日本を降りる若者たち』

下川裕治

講談社 2007

80～90年代、アジアの街に長期滞在する「沈没」組は、いつかは日本に帰る「旅行者」だった。下川が本書で紹介する21世紀の「外こもり」

は、日本社会に希望をなくし、国内での内こもりにも疲れ果て、日本を棄てた若者たち。すでに旅行者ではないのだが、若者の旅離れとシームレスに繋がっている気がする。いまから10年前の取材だが、状況はいまもさほど変わらない。

『インパラの朝』

中村安希
集英社 2009

誰だったか、旅行記というのはどこで何をしたかではなく、どんな文章で表現しているかが重要だと言った。本書で開高健ノンフィクション賞を受賞した中村の文章は、時にタシカを切るように、時に妙に冷静に、時に分析的にと、切れ味のいい文章で彼女の内面そのままの運びを見せる。そのオンナっぷりがいい。若者(とくに男性)が旅をしなくなりはじめた頃、女性の旅人は屈強な精神を持っていた。

●2010年代

ネットに押されて、旅行書籍への関心の低下、分散化が進む。時代の旅の語り部が登場するのはいつ？

インターネット、スマホの普及、テレビ多チャンネル化による旅番組の増加などで、出かけなくても誰でも簡単に異文化を知ることができる時代。それは同時に旅行作家が育ちにくく、優れた作品が生まれにくい時代でもある。絶景ブーム・世界遺産ブームなどで旅のビジュアル本は元氣だが、相対的にじっくり書き込んだ読み込む旅行記・紀行書は不調。だからこそ求められるのが、生き方やライフスタイルなど、新しい旅の切り口だ。

『世界しあわせ紀行』

エリック・ワイナー
早川書房 2012



旅で幸せ探しをする人はきつと多いだろう。では幸せとはいったいなのか？ ニューヨーク・タイムズの

記者だった著者は10カ国を訪ね歩いた。分厚いページにユーモアたっぷりに書かれた各国の人たちの幸せ談義が満載。国ごとの幸せ感覚の違いが出ていて興味深い。本書はテーマを持って旅する本の好例でもある。

『TRUE PORTLAND』

BRIDGE LAB メディアサーフ
コミュニケーションズ 2014

大手チェーン店より、地元のローカル店を大事にする街。そう聞くだけで、この街の魅力がわかる。全米で住みたい町No.1に選ばれた街ポートランドのガイドブックが本書だ。といっても旅のガイドではなく、クリエイティブなひとがこの街の暮らしをどう楽しむかというガイド。そんな本が書店の旅行本コーナーで売りに売れた。旅に求めるものがこんなにも変化してきていることの証左でもある。エコロジー、オーガニックといった新しい価値観に旅も寄り添っていく。

『The Songlines ソングライン』

竹沢うるま 小学館 2015
1021日、103カ国を巡る旅



の記録。処女作にして352ページ。このボリユームは旅の重さでもある。『深夜特急』から30年。久々にズシリとくる旅の書き手の登場を感じた。多くの優れた写真集を出し新進写真家として注目されている彼だが、作家としての2作目にも期待したい。

駆け足で時代ごとの旅の変化と、その時々を読まれた旅の本を俯瞰してきた。

紙数の都合で取り上げたくても割愛せざるを得ない本もたくさんあったが、その一方で、一世を風靡し

た『深夜特急』のような旅の本の巨人が、その後登場しないまま30年近く経っていることにも気付かされる。旅行の普及・大衆化やネットの発達の中で、まさに「レジェンド（伝説・偉人）」と呼ぶにふさわしい旅の本はもう登場しないのか。あるいは必要とされていないのか。

力のある新しい旅の書き手が再び登場して、21世紀にふさわしい旅の姿を見せてくれ、旅心を掻き立ててくれることを期待したい。

(あらきさちお)

荒木左地男 (あらきさちお)

旅行作家・旅行ジャーナリスト
1973年東京教育大学(現・筑波大学)卒業。在学中から放送作家としてテレビ・ラジオの海外情報番組を担当。海外ブランドの広告マーケティング、博覧会・パビリオンの企画プロデュース等を手掛けると同時に、旅行作家として世界70カ国を旅し、著書8冊の他新聞雑誌への執筆、講演イベント出演多数。現在、代官山鳥屋書店旅行コンシェルジュ、(一財)日本ユースホテル協会理事を兼務。

図 旅の本 年表

<p>50年代 戦後旅行記の夜明け</p> <p>旅のフロンティア時代 限られた人だけが行けた 海外旅行の記録</p> <p>敗戦後、 旅の鎖国状態。 海外情報に 飢えた人びと</p>	<p>1945 終戦 1957 『インドで考えたこと』 堀田善衛 1959 「兼高かおる世界の旅」 放送開始 『どくとるマンボウ航海記』 北杜夫 『オン・ザ・ロード』 ジャック・ケルアック</p>
<p>60年代 海外旅行の夢膨らむ</p> <p>海外渡航解禁。 アメリカ、ヨーロッパなど あこがれの先進国への まなざし</p> <p>何でも知りたい若者が 少ないドルを持って 旅に出る。</p>	<p>1960 『忘れられた日本人』 宮本常一 1961 「トリスを飲んでハワイに行こう」 キャンペーン 『何でも見てやろう』 小田実 1962 堀江青年ヨットで太平洋横断 1963 『ヨーロッパ1日5ドルの旅』 アーサー・フロムマー 1964 海外旅行解禁 持ち出し外貨ひとり年1回 500\$ 東京オリンピック ジャルパック誕生 1967 『青年は荒野をめざす』 五木寛之 1969 東名高速道路全通 アポロ11号月面着陸</p>
<p>70年代 旅の大衆化</p> <p>インド・アジア への視線 近いけれど 知らなかった 風土と人びと</p> <p>東海道・山陽 新幹線開通で ローカル鉄道旅 見直される</p>	<p>1970 大阪万博 ジャンボジェット登場 ディスカバー・ジャパンスター 1971 ニクソン・ショック ドル変動相場制に 1972 海外渡航者100万人突破 『印度放浪』 藤原新也 1975 ベトナム戦争終結 1976 『ポバイ』創刊 アメリカ西海岸ブームの火付け役 『河童が覗いたヨーロッパ』 妹尾河童 1978 成田空港開港 『悲しき熱帯』 レヴィ＝ストロース 1978 『時刻表2万キロ』 宮脇俊三 1979 『パリ・旅の雑学ノート』 玉村豊男</p>
<p>80年代 若者が主役の旅時代</p> <p>若者の冒険旅 ひとびとの 暮らしを見る ミクロな旅</p> <p>格安航空券が 下支えした バックパッカーブーム</p>	<p>1980 『わしらは怪しい探検隊』 椎名誠 1983 東京ディズニーランド開園 1985 プラザ合意 円高進行 1986 パブル景気はじまる 『ゴージャス・インド』 蔵前仁一 『深夜特急』 沢木耕太郎 『アラスカ光と風』 星野道夫 1988 アメリカ ビザ免除 瀬戸大橋開通 青函トンネル開通 1989 『幻の怪獣ムベンベを追え』 早稲田大学探検部 (高野秀行)</p>
<p>90年代 旅スタイルの多様化</p> <p>旅のスタイルの 多様化</p> <p>気負わない 脱力系の旅</p> <p>内面を 見つめる旅</p>	<p>1990 湾岸戦争 『バタゴニア』 ブルース・チャトウィン 1991 ソ連崩壊 1994 1ドル100円割れ 『アルケミスト』 パウロ・コエーリョ 1995 海外渡航者1,500万人に 1ドルが79円に 『アジア・ジャパニーズ』 小林紀晴 『もの食う人びと』 辺見庸 1996 猿岩石ブーム 星野道夫ヒグマ襲撃事件 『ハワイ紀行』 池澤夏樹 1999 EC統一</p>
<p>2000年代 若者旅の変化</p> <p>女性の視点 ひとが行かない場所へ ひとがしない 旅のかたち</p> <p>新しい ライフスタイルを 求めて</p> <p>ナチュラル志向 人生の幸せ追求</p>	<p>2000 『ガンジス河でバタフライ』 たかのてるこ 2001 アメリカ同時多発テロ 2002 『旅行者の朝食』 米原万里 2003 イラク戦争、SARS流行 冬ソナブーム 2007 オーストラリアのLCCジェットスターが日本路線就航 『日本を降りる若者たち』 下川裕治 2008 リーマン・ショック 2009 『インバラの朝』 中村安希</p>
<p>2010年代 旅本模索の時代へ</p> <p>時代を魅了する新しい 旅の本は登場するか?</p>	<p>2011 3.11東日本大震災 福島原発事故 アラブの春 2012 『世界しあわせ紀行』 エリック・ワイナー 2014 イスラム過激派組織「ISIL」、国家樹立宣言 『TRUE PORTLAND』 BRIDGE LAB 2015 『The Songlines ソングライン』 竹沢うるま</p>